

# 日風集

〈高知県立歴史民俗資料館〉

第6号 1992年12月1日

## 松茸・兼山・一豊

高知県立図書館嘱託

依光貫之

秋の味覚といえば、かき・くり・なし・ぶどうと数えて、さて松茸はどうかと首をひねった。さてよ、これは庶民にとっていまや味覚の対象ではない。せいぜい「秋の嗅覚」というべきではなからうかと。

松茸がこんなに高価になり、われわれの口に入らなくなったのはいつ頃からだろう。私は田舎育ちということもあって、子供の頃にはむぎむぎと松茸を食った記憶がある。その季節ともなれば自然に親戚や知人から届くので、特に珍しがらる訳でもなく、魚の匂いのしみついた鉄灸の上に並べ、醤油のつけ焼きにして食べた。とりたてていう程の味もなければ、腹のたしにもならぬ。大人に促されて鼻をすり寄せて香りを確かめ、ああこれが秋の味覚というやつかと納得したものだ。当時は、特に田舎では、いくら安くてもこんなものを金をかけてまで食べようという者はいなかったはずである。

ところで、私たちの先祖が松茸の価値をはじめて認識した(させられた)のはいかなる契機によるのであろうか。ここに野中兼山が、物部川上流の柳瀬

村(現物部村内)庄屋左次右衛門に与えた手紙がある。現代風に書きなおすと次のとおりである。

そちらで初めてできたということ  
で松茸をよこしたので、早速(殿様に)差上げた。初めてできたため、  
村の者は取り頃を知らなかったの  
であろう、前方に取ったものとみえる。  
取つてよい時期は、くきが立ちのび、  
傘が開きすぎない時である。これか  
らは左様に心得て、くきが立ちのび  
たばかりのものを少しづつ持たせる  
ように。まだ立ちのびざるものは、  
追々立ちのびた時に持たせ差越すべ  
きである。

細部にまで目を光らせ、直接指図をし、づめを押すのが兼山流とはいえ、土佐の国土改造に奔走するかたわら、



山内一豊画像(模写)  
高知県立歴史民俗資料館蔵

松茸のとり頃まで指示していたとは驚きである。兼山にとって松茸は、ただ殿様の食膳を賑わすためだけのものではあるまい。当時全国市場をにらんで推進していた商品開発策の一環であり、特に幕閣や諸大名に差出す進物としての有用性に着目したればこそ、このように力をいれたのではなからうか。そちらで初めてできた」というけれども、実は兼山の指導と督促によって発見されたということであろう。村人たちは、殿様がこんなものを召しあがるのかと驚いたかもしれない。

兼山の手紙から七十年ほどさかのぼった文禄三年(一五九四)の秋、当時遠州(静岡県)掛川の領主だった山内一豊は、領内の松茸山で松茸狩を楽しむつもりでいた。あらかじめお山方の役人を山番につけてあったところ、家中の若侍がきてさんざん山を荒したので、山番はもろろん大怒り、配下の者が山上より石を落として若侍たちに疵を負わせた。山番の怒りはおさまらず、丁度その翌日が諸士の登城日だったので、満座の中で若侍どもの狼藉ぶりを言上に及んだ。件の若侍はもちろん、父兄ともども恐れ入るばかり、一豊の顔面がみるみる朱に染まるのを窺いつつ、どうなることかと肝を冷し身をすくめていた。

ところが、山番がさらに言いつのろ  
うとしたところ、一豊はこれをさえぎ  
り逆に山番の方を叱りつけたのであ  
った。「侍どもはことに臨んで身命を捧げ  
るやからである。一時のなぐさみに草  
木を手折ったからといって、下郎の分  
際でこれを咎めだてするとはけしから  
ん。だいたい山中の制禁は下じもの立  
入りをとどめたもので、武士の入山ま  
で禁じるものではない、それをきき  
がえてとやかく言うのは不届きであ  
る」と。これでは任務に忠実な山番と  
しては立つ瀬があるまい。

この話を、単に一豊の部下おもいを  
証明する逸話としてすますわけにはい  
かない。山中禁制の趣旨が一豊の言葉  
どおりであったとすると、あらかじめ  
それを山番の者に告げておかなかつた  
ことこそ問題ではないか。

戦国の余燼がおさまったばかりの当  
時、松茸刈りなどは武士に不相応なレ  
ジャーであり、それに手を染めること  
への気恥かしさが一豊の心の片隅にあ  
りはしなかったか。若侍たちの狼藉沙  
汰がそのことへの無言の批判であるこ  
とに思い至って、彼の顔面は紅潮し、  
山番への見当はずれの叱責となったの  
ではなからうか。この事件があった文  
禄三年以降、一豊が松茸狩りをやった  
かどうかは寡聞にして知らない。

## 企画展 土佐の戦国時代を掘る

平成五年一月一五日（金・祝日）～三月二一日（日）

岡本 桂典

戦国考古学とは、日本の戦国時代を  
物質資料の研究をとおして明らかにす  
る考古学の一分野である。その年代は、  
ほぼ十五世紀の中頃から十六世紀にか  
けての時代で、群雄割拠の動乱の時期  
をいう。

戦国時代は、その時代名の如く戦い  
の時代である。この時代に歴史上に登  
場するのは、武士が主体である。しか  
し、彼らを支えていたのは、農民や職  
人、そして商人であった。さらに殺伐



春野町芳原城跡



中村市扇城跡

たる時代に精神的ゆとりを与えたのは  
僧侶たちであった。

戦国時代の考古学の対象となる資料  
は多岐にわたっている。その中でもこ  
の時代を象徴するものは、やはり戦い  
の拠点となる城館跡である。

土佐における戦国考古学の始まりは、  
昭和四十八年（一九七三）に行われた  
伊野町波川城跡の発掘調査が最初であ  
る。次いで中土佐町久礼城跡、中村市  
中村城跡・扇城跡、春野町吉良城跡・

芳原城跡、梶原町和田城跡、南国市岡  
豊城跡、高知市浦戸城跡などの発掘調  
査がなされた。

芳原城跡は、一五世紀の後半から一  
六世紀初めにかけて造られた城で、詰  
めからは天守的な機能をもつ掘立柱建  
物跡や二の段からは政所と考えられる  
建物跡、鍛冶が行われていたと思われ  
る建物跡や土壘などが発掘されている。  
この時期の山城は、土造りの城と呼ば  
れている。



南国市岡豊城跡三ノ段 土壘・石垣、礎石をもつ建物跡

一六世紀の山城跡として県内で著名な城跡は、長宗我部氏の居城であった岡豊城跡である。この城跡からは石垣や礎石をもつ建物跡、そして瓦を葺いた天守の前身と考えられる礎石をもつ建物跡などが発見されている。この城跡の詰からは、天正三年（一五七五）銘の年号を刻した瓦も出土している。天正三年は、長宗我部元親が土佐を平定した年で、この時期に城を修築したことが考えられる。この時期の石垣や瓦を葺いた建物をもつ山城を石造りの城と呼んでいる。この城跡は、近世城郭へと徐々に近づいていく様相を物語っている。



陶磁器・銅鏡 (芳原城跡・田村遺跡群)

落の建物は掘立柱建物で、溝に囲まれた中には四〜五軒の建物とそれに付随する井戸などをもつものである。これらの城館跡や集落跡では色々な物が使われ、それらが出土物として発見される。城跡では、戦いの道具である火縄銃の部品や弾丸、小刀などが出土し、日常生活用品としては、土師質土器や輸入された青磁碗・皿、染付碗・皿、赤絵碗などがある。また、木で作られた種々の道具も多く発見された。芳原城跡からは、腕や箸、柄杓、曲物の底、下駄、大足など数多くの木製品が出土している。

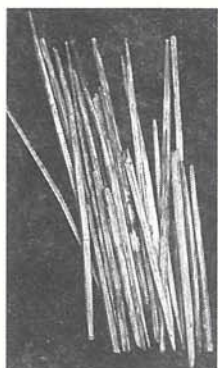
さて、これらの物の流通に欠かせないものは銭である。戦国時代の銭は、



曲物底

下駄

(芳原城跡)



箸 (芳原城跡)



懸仏 (南国市岡豊城跡)

戦国時代の武将の墓も多く残っている。墓はほとんどが五輪塔や宝篋印塔などの石造塔婆である。これらの墓塔に対し、中世を代表する板碑が高知県では一六世紀に集中して造立されている。このように戦国考古学は、史料には表れない戦国時代を物によって我々に語ってくれるのである。



渡来銭 (岡豊城跡)

国内産ではなく中国などから輸入された渡来銭が用いられていた。

また、武士や民衆の心の拠り所となった信仰関係の資料も多く出土している。境界内の安全や招福除災に用いられた護符である大般若経転読札や人形や陽基などの民間信仰的な物も発見されている。さらに、岡豊城跡からは懸仏が出土しており、城に社殿の存在が考えられる。



伝長宗我部元親墓

高知市長浜天甫山



陽基



人形

(芳原城跡)



大般若経転読札 (田村城館跡)

## 黒潮と土佐の鯨文化のきずなを求めて

当館運営審議会専門幹事 広谷喜十郎

## 土佐の捕鯨史

土佐史談会評議員

島村泰吉

高知県には海の資料館も無いし、土佐海洋史の本格的な著述もまだ無いようです。捕鯨基地は大きく分けて紀州、長州、西海地方、土佐の四地域がありますが、日本が鯨文化研究大国になるためには、その四地域が連絡をとりあっていく必要があると思います。

次代の人々に現在の問題をどうつなげていくかも考える必要があります。

私が気になっている問題に、鹿島神社の鰐口があります。この奉納には、慶安四年説と五年説がありますが、実際は四年正月の銘が入っています。尾池氏が佐賀町で捕鯨をはじめたのが慶安四年ですので、大漁の記念というのは後世の記録ではないかとも思います。また、現存してはいませんが、香美郡前浜の伊豆田神社と室戸の八王子宮へも鰐口を奉納しています。室戸は捕鯨場所ですが、伊豆田神社にも納めたのは何故か。これらは、おそらく海の神に捕鯨をはじめたあいつとして納めたのではないかと考えられます。

さて、鯨文化について幾つかみていきます。紀州や西海地方には、鯨の墓や塚がありますが、土佐にはないようです。かといって、土佐人は鯨に対して思い入れが無い訳ではなく、土佐清水の窪津には鯨地蔵があり、室戸には鯨の位牌などがあります。

また、鯨の利用については今回の展示品からくり人形がありますが、そのゼンマイは鯨のひげでできています。文楽の人形の目玉のからくりにも鯨のひげが使われ、歌舞伎の小道具にも使われています。捕鯨の禁止は、日本の伝統芸能にまで影響するわけです。

鯨油は稲の害虫駆除に使われました。土佐では享保十六年に藩の役人がこれを提言しています。慶安五年の史料によると、土佐での米の消費は三十六万石だが、生産高は二十五万石、不足分を粟や麦、稗で補っても三十一万石でした。ウンカが大発生し、生産高が激減することもありました。鯨油が無ければさらに被害は大きかったでしょう。

ところでペリーの来航も、アメリカの捕鯨船が水や薪を積む港として日本を必要としたためであり、鯨は開国の人でもあったわけですね。ジョン万次郎が、漂着した鳥島から救出されたのもアメリカの捕鯨船によってでした。

(文責・中村)

かつて室戸では、鯨が日常生活の中に完全に入っていました。神祭には、鯨の御馳走が出たものでしたし、「室戸市史」を編纂する際、古老からこともこの頃には、帆掛け舟が通るくらい沖を鯨が通ったものだとも聞きました。

今回の展示品に、香川県の金刀比羅に奉納された河田小龍筆の絵馬の下絵があります。記名はありませんが、絵柄の類似性からいろいろ調べ、小龍の孫の宇高氏にも確認してもらいました。下絵に描かれた場違いな人は、おそらく小龍自身だと思います。小龍が捕鯨の現場で写生をしたからこそ、写実的で生き生きした絵になったのでしょう。

土佐の捕鯨のことについては、吉岡高吉氏によって、その実態が今に伝わったという気がしてなりません。吉岡氏は、捕鯨の羽指などの話を聞き、また「土佐捕鯨史」を著した伊豆川茂吉氏にもたくさん史料を提供しています。

網捕鯨は紀州ではじまりました。土佐では網捕鯨や網取り法などいいますが、紀州では網掛け鉤突き捕鯨などというようです。網を掛けて鉤で突くわけですから、紀州のいい方が理にか

なっているように思います。

この方法では、まず、山見が山の上から鯨をみつけ、鯨の種類によって異なる標をあげます。次に、勢子船が鯨を三十尋(約四十五メートル)の深さの漁場に追い込んで来ます。そこで総指揮者(沖配)が采を振ると、網船の網を一斉に降ろします。網が鯨に絡み付き自由を奪うと鉤を投げて鯨を弱らせ、鯨の背中に二の字型に切り込みを入れます。これに網を通して二艘の持双船の間に渡した柱に鯨を縛り付け、とどめを刺しました。寛政七年には、総勢約五百人が捕鯨に従事しており、当時の大企業でした。この網捕鯨では年間鯨を三、四十頭ほど捕る程度で、近代捕鯨とは違い、鯨は減りませんでした。

さて、今回は出品してもらえなかったのですが、寺田寅彦が随筆「初旅」で紹介した絵巻があります。「それを永久に安全な場所に安置し、そうして篤志者にはいつでも見られるようにするだけのめんどろを見てくれるという事になれば」と寅彦は述べています。

(文責・中村)

史料紹介

城下町家扣(二)

吉村 淑甫

南片側町分

(表口)

(裏行)

西表 七間半 拾七間 山澤屋 長藏

西表 式間 拾間 右同人

西表 三間 六間 田村 良助

西表角 八間 六間 虎屋 三良平

南表 五間 拾老間 徳永 宅平

南表 三間半 拾三間 池添 直八

南表 三間半 拾三間 他支配祖及清次郎

南表 三間半 拾三間 下田屋 米次

南表 七間五尺寸五歩式拾式間四尺 但東二而半間式拾式間四尺

南表 九間 式拾式間五尺 右同人

南表 五間 式拾式間五尺 武市半平太

南表 六間 式拾五間式尺 島村 周八

南表 三間三尺 拾間 樋口 清吉

南表 五間 拾間 米屋 八十八

南表 七間式尺 拾間 高橋 廉平

南表 八間 八間老尺五寸 右同人

南表 六間半 式拾三間四尺寸五歩 榎屋太次右衛門

南表 六間半 式拾三間 小谷善五郎

南表 五間 式拾老間 山内昇之助殿家業 岡本楠馬

南表 四間半 式拾間 他支配祖及久治

南表 三間半 拾九間 長崎 慶助

南表 三間半 拾八間三尺 嶋村源次郎

南表 六間式尺 拾三間式尺 横田 楠丞

南表 三間半 拾三間老尺 濱口関右衛門

南表 三間半 拾三間老尺 公文源三良

南表 拾四間 下代類 栄七

南表 東二而九間 田内喜參次

西表 (表口)

西表 (裏行)

西表 七間 六間半 山田町筋北側分

西表 三間半 拾三間 六間半

西表 五間半 式拾間 拾三間

西表 五間半 式拾間 式拾間

西表 六間 式拾間 式拾間

西表 三間半 式拾間 式拾間

西表 三間半 式拾間 式拾間

西表 東西三間半 右足輕類金次郎裏統二有

西表 半間 南北拾間

西表 五間 式拾間

西表 四間半 六間四尺

西表 三間半 六間四尺

西表 三間 三間四尺

西表 三間 三間半

西表 三間 三間半

西表 三間 三間半

西表 七間 拾間半

西表 四間 九間

西表 四間 九間

西表 五間 七間

西表 四間 五間

西表 四間 九間

西表 三間半 七間

西表 三間半 式拾間

西表 三間半 式拾間

西表 三間半 式拾間

徳屋 喜丞

稲毛 多藏

右同人

江村 弥平

土居弥之助

近森 慶七

依岡 宅藏

下代類左衛門

足輕類 金次郎

下代類 宅助

右同人

鍛冶 源七

榎屋 幸平

田中重次郎

右同人

右同人

右同人

田村屋 兼藏

石村 市丞

上嶋 貞丞

御数寄 源次郎

塗師宇 七

右同人

御数寄 源次郎

長崎 茂平

横川 貞助

久保弥平次

三間半 式拾間 山中常太郎

三間半 式拾間 池内 嘉藏

三間半 式拾間 御扶持人五藏 團六

三間半 式拾間 尼崎屋 貞平

三間半 式拾間 中山 孫助

四間 式拾間 中山 孫助

四間 式拾間 植村 禮助

五間 式拾間 浦 與平

西表 七間半 六間 吉村 来平

右表 式間半 六間 髮結 太平

南表角 六間 長木屋 源藏

南表 三間半 拾間 森 善之進

南表 三間半 式拾間 田村芳右衛門

右同 八間 式拾間 藤坂 柿丞

右同 七間 式拾間 坂本 甚六

右同 七間 式拾間 楠瀬六右衛門

右同 七間 式拾間 宮地直右衛門

右同 三間半 式拾間 宮地喜馬太

右同角 七間 式拾間 右同人

(註記)

「南片側町分」は、前回の「井手端西側分」菜園場掘割に添うた場所につづくもので、則ち田淵町に当る箇所である。此処には武市半平太住家が出てくる。又、榎屋太次右衛門の名もある。榎屋は入交氏の屋号である。嶋村源次郎」は武市半平太の妻富子の父に当る。「濱口関右衛門」は手結の庄屋として知られた人。さらに田内喜參次(菜円)が居住する。この人は半平太の弟、衛吉の父親である。

「山田町筋北側分」は北新町に当る幕末の博学稲毛多藏(実)が居る。貸本屋「田村屋兼藏」は獄中の半平太へ本の差入をした人。「吉村来平」は鉄砲方として知られた人で新町の彼方此方へ借家を持っていたようである。その名が何か所か出てくる。楠瀬六右衛門は旧姓来正元三郎で楠瀬大枝の五女笑に入夫して大枝の後継者となった。

『高知共立学校資料集』

土佐女子高等学校編

本年一〇月、土佐女子高等学校編『高知共立学校資料集』が、同校の竹本義明教諭らの御尽力により刊行された。

高知共立学校は、立志学舎（明治一二年廃校）の再興を目指した土佐の民権派の主導下に、明治一五年（一八八二）五月に開設された男子校である。同校の資料が土佐女子高等学校に継承されたゆえは、明治三六年同校が私立土佐女学校（後の土佐女子高等学校）に吸収合併されたことによる。

本書には、土佐女子高等学校所蔵の共立学校関係資料のうち、「高知共立学校日誌」と「高知共立学校委員会決議録」がすべて掲載されており、また「高知共立学校時代文書」も必要に応じて抽出記載されている。

特に、日誌については、詳細な〈編者注〉が施されており、当時の時代背景や登場人物（多くは民権活動家）の動向が理解し易いように工夫されている。これは、——本書が土佐女子高等学校創立九十周年記念に出版される本であるからには、ごく少数の研究者に

呈するのみにとどまらず、生徒や一般の御父母の皆様にも読んで分かっていただける程度の本でなければ、もったいないのではないか〈編集序言〉——という、編者の周到な配慮によるものである。

この〈編者注〉によって、本書は土佐の明治教育史ばかりでなく明治政治史ともなっており、高知共立学校の日日の運営状況から当時の民権運動の盛衰までが立体的に把握できる。明治一四年一〇月、世は北海道開拓使官有物払下事件に沸いていた時、片岡健吉・山田平左衛門・島地正存らの立志社幹部は共立学校設立委員に推されており、翌年五月の共立学校開校の直前には高知で海南自由党が結成されている。しかし、民権運動の退潮とともに共立学校も不振となり、明治三六年の吸収合併を迎える。

編者は、この波瀾にとんだ共立学校史を資料紹介という形で精確に明らかにされ、真摯な教育者の視点を堅持しながら九十周年記念事業にふさわしい大著を完成させている。（下村公彦）

歴史散歩

関川家住宅

第六回

〈高知市一宮〉

国の重要文化財に指定されているのは、主屋、表門、道具倉、米倉である。主屋の建築年代については座敷の本床の壁下にある雑巾摺（ぞり）という部分に墨書があって、それには「于時文政二卯歳後四月上旬張之野田村大工彌左衛門作」と記されており、文政二（一八一

九）年の建築であることが推定される。平屋建てで外観は式台、座敷部分が張出して、し字型になっている。屋根は茅葺きであるが、庇（ひさし）の部分が瓦葺きで、庇が大きく張り出すことで、多くの部屋を擁することが可能になっている。

主屋の内部は、トリノマ、土間、用の間、居間、台所、奥の間、仏間、女子部屋、式台、座敷から構成されており、多くの部屋が複雑に組合わさっているようであるが、使い方で空間を分けてみると、土間の空間、居間の空間、寝室の空間、接客の空間に分けられるようである。

興味を引かれるのは、接客空間と居住空間の雰囲気の違いである。接客空間である座敷や式台には床の間や檜かけがあって、美しい庭園に面しており、

兼座（と）としての性格を残している。一方、居住空間は、柱、桁、梁が見え、囲炉裏のある居間は板張りで素朴な農家のたたずまいである。

この住宅は、平地における近世豪農の住居の典型的な例として貴重な遺構である。

県交通・自動車学校前バス停から歩いて3分。国道32号線側からは裏門から入ると見学できる。

（曾我満子）



関川家住宅

## 二ニュース

### 企画展示室から

#### 「鯨の郷・土佐

#### —くじらをめぐる文化史—

今回の特別展では、土佐捕鯨の歴史と文化を、県内外の約七十点の資料によって紹介した。鯨組の信仰や習俗に関する資料により、奥行きのある展示となった。また、人と自然との関わりを考えるきっかけともなればと、「鯨との共生」のコーナーなどを設けた。

県内では、かつて鯨漁が盛んであった室戸市や土佐清水市、佐賀町などから、文書や絵図、各種の道具などの捕鯨関係資料を展示した。なかには今回はじめて紹介する資料もあった。

技術の伝播を物語る他県の資料とし



「鯨のすべてをいかにす」のコーナー

ては、土佐人が網取り法を教えてもらった紀州から、鯨発見、捕獲、解体などの捕鯨の各場面を描いた屏風をはじめ、さまざまな捕鯨絵巻を紹介した。佐賀県からは、その後の各地の捕鯨図の写本となったといわれる資料を紹介し、宇和島からは、海路の参勤交代に鯨船が描かれている絵巻を紹介した。

資料をご所蔵する方をはじめとして関係各位のご厚意によって充実した内容となった。しかし、今回展示したものが鯨関係資料のすべてではなく、ご厚意をいただきながら展示できなかった資料があったことをおわびしたい。

開催期間中には、土佐の海に來遊する鯨を見るホエールウォッチングの様子などを約五分にまとめた映像資料「土佐の鯨」を体験学習室にて放映した。

関連企画として、広谷喜十郎氏と島村泰吉氏による講演会を開催した。広谷氏の講演は、油やひげなどの鯨体の利用をはじめ、歴史において鯨が果たした役割など、鯨文化についての幅広いものであった。また、今後の海洋史研究に多くの問題を提起し、刺激的であった。島村氏の講演は、土佐捕鯨の歴史を中心としたものであり、同氏の調査研究に基づく展示資料の詳しい紹介や、網捕鯨の漁法についての臨場感あふれる解説などに、受講者は聞き入っていた。

## 〔歴史館日録〕

月日	出来事
一月二〇日	秋の特別展「鯨の郷・土佐」鯨をめぐる文化史」開幕
一月二四日	秋の特別展講演会
一月三〇日	第二回史跡巡り「嶺北地方の史跡と文化バスツアー」アンコール
二月二五日	秋の特別展閉幕
二月二六日	第三回史跡巡り「津野山郷の神楽と歴史バスツアー」

### 〈第二回 史跡巡り〉

去る十一月十六日、津野山郷の神楽と歴史」のバスツアーを行い、紅葉あ



津野山神楽

ざやかな山里の豊かな歴史の息吹にふれると共に、津野山神楽を見学し有意義な一日を過ごしました。

## ユア・ボイス

鯨の企画展開催中に実施したアンケートの回答の中から、いくつかの御意見・感想を紹介いたします。

「今日私達の生活とは遠い存在になりつつある鯨、しかも土佐に縁の深い鯨について再考したのは意義深い。」

「捕鯨の歴史と人々の苦労がよく分かりました。まさに、鯨の郷・土佐を実感しました。」などの称賛を頂いた反面、「もっと資料を豊富に展示してほしい。」「環境問題への突っ込みがほしかった。」などの貴重な御批判も頂きました。また、遠足シーズンとあって小学生の来館が多く、鯨の生態の展示特にナガスクジラ雄生殖器を見て「大きい」との声が聞こえました。かつて土佐人が捕獲していた鯨の巨大さを実感してもらえたことと思います。

今後どのような企画展を希望しますか?という質問には、「歴史の表舞台に登場しない土佐の人物について」とか、「考古学的なテーマ」や「土佐の地図を」などの御意見がありました。埋文展は来年一月に、地図展は四月に開催の予定です。

## 〔企画展の案内〕

### 土佐の戦国時代を掘る

平成五年一月十五日（金・祝日）～三月二十一日（日）まで一階企画展示室にて開催します。

高知県でも高知空港拡張整備事業に伴う南国市田村遺跡群の発掘調査を契機として、中・近世の遺跡の発掘調査が多くなりました。

今回は、戦国時代に焦点を合わせ、県内の戦国時代の遺跡——南国市田村城館跡・春野町芳原城跡・中中市扇城跡・南国市岡豊城跡・高知市浦戸城跡・南国市田村遺跡群などから出土した遺



天正三年（1575）銘瓦

南国市岡豊城跡・詰

物を展示し、土佐の戦国時代を垣間みてみたいと思います。また、社寺に伝世した戦国時代の資料も参考として展示します。

入館料は、大人四〇〇円、中学生一五〇円、小学生五〇円（常設展込み）

## 〈講演会〉

### 第一回

日時 平成五年一月二十三日（土曜日）

午後二時から四時まで

「土佐の中世山城」

（助高知県文化財団 埋蔵文化財センター調査員 松田 直則氏

「発掘された長宗我部氏の城——岡豊城跡——」

（助高知県文化財団 埋蔵文化財センター調査第二係長 森田尚宏氏

### 第二回

日時 二月二十七日（土曜日）

午後二時から三時まで

「仏教考古学が語る戦国時代の土佐」

（当館学芸主事 岡本 桂典

## 〈講演会〉について

右の企画展関連講演会は、入場無料で定員は八〇名です。

参加希望の方は、各講演会開催の一週間前迄に希望日を記入の上、葉書にてお申し込み下さい。

## 〈利用案内〉

開館時間 午前9時～午後5時

（入館は、午後4時30分まで）

休館日 毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日

入館料 一般・400円／中学生・150円／小学生・50円

（常設展示）生・50円

団体（20人以上）割引あり

（療育手帳・身体障害者へ1・2級）手帳所持者は無料。毎月第2土曜日は小中高生は無料

## 交通機関

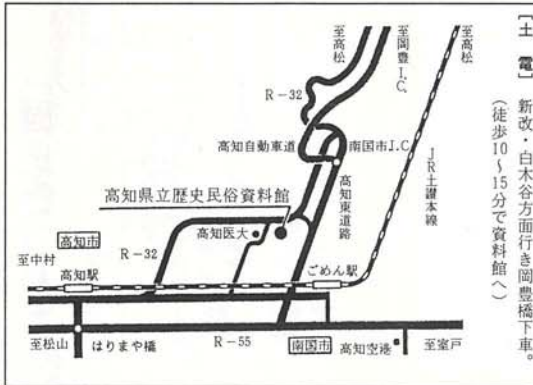
高知市中心部から車で約20分。

駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。バスを利用する場合は次のとおり。

〔公共交通〕 船岡南団地発歴史館行き終点下車。領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴史館入口）下車。

（徒歩5～10分で資料館へ）

〔土電〕 新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。（徒歩10～15分で資料館へ）



## 〔図録販売中〕

○「鯨の郷・土佐くくじらをめぐる文化史」展示解説図録

頒価千円送料一冊三二〇円

頁数八八頁（内カラー六四頁）

二冊以上のご注文はお問合せ下さい。残部僅少。

## ○「常設展示案内図録」

頒価千五百円送料一冊三二〇円

オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

## 〈ひとこと〉

鯨展が無事終了してほっとしております。御協力頂いた方々に對し、心より感謝申し上げます。（中村）

正月から始まる企画展「土佐の戦国時代を掘る」の準備で大わらわ、頭の中が「戦国時代」になっております。（岡本）

毎月第二土曜日には、一階体験学習室において小・中学生向きの歴史番組（ビデオ）を放映しております。是非御利用下さい。（但し、他の行事が入った場合には放映を休止します。）

平成四年二月一日

編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783南国市岡豊町八幡1099-11

TEL 0888-16212211

FAX 0888-16212110